講演：2010.11.28
八木歴史講演会記録
【110429版】

# 幕末の大和と谷三山

講師：谷山正道（天理大学　文学部教授）

## はじめに

八木では、2004年7月に「おかげ参りと八木」というテーマで話しをさせていただきました。今日は谷三山について触れながら、「幕末の大和」について話します。（御子孫の方がいらっしゃるのに失礼ですが、呼び捨てにさせていただきます。）

江戸幕府は、三代将軍家光の時代から長らく鎖国を続けていましたが、幕末になると、産業革命を行った欧米列強諸国がアジアに進出し、開国を迫ってきました。嘉永6年（1853年）にペリーが来航し、翌年に開国、安政5年（1858年）には通商条約を結び、開港するにいたります。

そのころ国内では、尊皇攘夷運動と公武合体運動が対抗しながら展開し、その後幕府を倒して中央集権をと願う倒幕派により、明治維新にいたります。

※尊皇攘夷運動：天皇を頂点に力を結集し、外国勢力を排除しようとするき

※公武合体運動：朝廷と結んで幕府や諸藩が力をつけようとする動き

今日の課題は、そんな激動の幕末期に、私たちが住む大和の人々がどんな問題に直面し、どのような思いを抱き、どのような活動を展開するようになったかです。またその際、幕末の大和を代表する八木の儒学者谷三山の言動にも触れながら話してみたいと思います。

## 高取城と谷三山

著名な儒学者であった大和五條の森田節斎は、

「高取に過ぎたるものが二つあり　山のお城に　谷の昌平」

という言葉を残しています。

高取城は2万石余りの高取藩にしてはふさわしくない大きな立派なお城で、豊臣秀長の時代に郡山城を宇陀の秋山城とともに支えたといわれる百万石クラスにも値するお城でした。現在、日本三大山城のひとつにも数えられていますが、そうした立派な山城と、学者谷三山（谷昌平）の存在を、「高取に過ぎたるもの」としてあげています（なお、南八木は高取藩領でした）。

目次

はじめに.....1
内憂外患の深まり.....2
谷　三山について.....3
吉田松陰の来訪 .....4
地震とコロリ、大和にも.....5
幕末の世相　打ち壊し.....6
「世直り」への願い .....7
大和国高瀬道常年代記 ...8

講演会案内の言葉から

激動の幕末から明治維新、政治の中心地からすこし離れた大和八木にあって、時代を先駆した志士吉田松陰や、頼山陽に大きな影響を与えた八木の大儒学者谷三山との師弟交流と時代背景を交えた講演会を開催します。

谷山正道先生の紹介

天理大学文学部教授

専門分野：日本近世史

研究課題：幕政改革の研究
近世近代移行期民衆運動史
大和地域史

学外活動、経歴：

1979年に広島大学大学院文学研究科博士課程後期（国史学専攻）を中退後、広島大学附属中・高等学校教諭、広島大学文学部助手・講師・助教授を経て、1991年に天理大学に着任。1996年から現職。

高取城からみる景色

## 内憂外患の深まり

欧米列強からの外圧を受け、開国から開港にいたる時期に、わが国では相次いで地震とコロリ（コレラ）の流行が起き、まさしく内憂外患が深まっていきました。

まず、嘉永6年（1853年）6月にアメリカ合衆国の東インド艦隊司令長官ペリーが大統領フィルモアの国書を携え、4艘の軍艦を率いて浦賀に来航します。ときの老中阿部正弘（福山藩）がそれを受け取り、日本が開国要求に応じるか否かについては後日返事すると答え、一旦帰ってもらうことになりました。

この際、幕府は朝廷に報告すると共に、諸大名に対処の仕方について意見を求めました。これはこれまでになかったことで、外圧によって、幕府と藩の関係に大きな変化が起きたといえます。

中には積極的な開国論を唱えた彦根藩（藩主は井伊直弼藩）のような藩もありましたが、拒絶論が大多数でした。が、結局、幕府はアメリカの要求を受けて開国し、和親条約を結ぶにいたります。戦の後で条約を結ぶともっと悪い条約になることを考え、本心は拒絶したいのだけれど「開国やむなし」と判断したのでした。

谷三山（操）筆「勤分舎」旧平田家所蔵

こうした折、八木の谷三山は嘉永6年9月に、『靖海芻言』（せいかいすうげん）という外交に関する意見書を著わしました。当時谷三山は高取藩から禄（主君が家臣に与えた俸禄）をもらっていましたが、この『靖海芻言』は五千石の田原本の殿様である平野氏に提出したのでした。門弟のひとり吉村抑亭（よくてい）とのつながりがあったためといわれています。

しかし、幕府には提出されなかったことが後の書物でわかっています。『靖海芻言』は一万数千語に及ぶ膨大な意見書で、海外の地理・歴史や現状を勉強した上で著わされたもので大変注目すべき内容です。

# 谷　三山（たに　さんざん）について

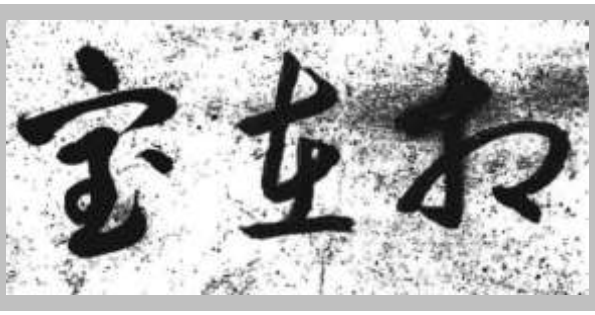
高取領であった南八木に享和2年（1802年）、三男として生まれました。実家は米穀の売り買いをされていて豊かな家でした。三山は耳が不自由で十代でほぼ聞こえなくなり、さらに幕末には目も見えない状態になりました。

日常の仕事をすることが難しかったのですが、家が豊かであったお陰で、読書三昧の毎日を送ったといわれています。学問についてはほとんどが独学で、中国の儒学・歴史書、日本の歴史書、ペリー来航の前には当時の欧米列強諸国のありようなど海外事情について記された書物も読んでいて、大変視野が広かったといえます。

28歳のとき、京都の著名な儒者猪飼敬所（いがいけいしょ）と筆談する機会をえましたが、その際に敬所は谷三山の学識に対して、

『清儒の博治（はくこう）にも勝るべし、老拙の及ばざるところ』（多くの学問に長け、年季を積んだ自分も及ばないほどの学識だ）

と驚いたといわれています。その後も二人の交流は続き、5年後には敬所が八木を訪れ4日間筆談して過ごし、その2年後には『相在室』（筆談の室の意）という扁額↓を三山に送っています。



そして三山は、天保11年（1840年）に家塾「興譲館」（こうじょうかん）の規約をまとめます。

当時の門人帳によると、門下生は50名余りを数え、田原本の吉村抑亭、田井庄の森鉄之助、備前の上田淇亭（うえだきてい）、高田の岡本通理（つうり＝黄中）、宇陀松山の久保耕庵・良平（種痘で有名）、小房の前部重厚（しげあつ）、石川の山田作治郎ら歴々たる弟子が学んでいました。遠方は備中からの門人もいて、多くの人がこの八木の谷三山のもとで学ばれました。

天保14年（1844年）に谷三山は高取藩から名字帯刀を許され禄をもらうようになります。門人外でも大和の儒者森田節斎（せっさい）や長州の吉田松陰（しょういん）が教えを請うたこともありましたし、松浦武四郎（「北海道）の命名者）が谷三山のもとを訪れています。（資料：『大和百年の歩み』大和タイムス社、1970）

### 谷三山の手紙から

高取藩の築山愛静（あいせい）と交流があり、三山の手紙が残っています。

「近来イギリス、アメリカの強盛なるも、亦ゆゑあることにぞ。いづれも処々に学校を設け、国中の俊秀をその中に教育して、治彊の術を講磨す。なかんずくアメリカの学もっとも盛にして、其一部生徒五十余万人に至るものありと承る。・・」

と記して、世界の列強は軍事力だけでなく学校教育が行き届いている事情を把握していたことがわかります。

また

「これをもなんの故ぞや、ただ船堅く礮利（ほうり）なるばかりにてはあるべからず、必ずその説あらん。かの稊稗（ていはい）の秋あるを見て、わが稲粱の未だ熟せざるを思ひ、大に学校を興し、盛んに生徒を聚め、厳に学制を立て、教育の方を尽し、つとめて浮華を斥けて実効を収めん。」

とアメリカに学んで学校教育の大事さを説いています。

ここで注目すべきは、谷三山は欧米の強国の国内事情に通じていて、それらに学びつつ国力充実、とりわけ学校教育制度の整備の必要性を唱えていることです。広い視野をもった上の発言であると思います。

植村家長屋門（県指定文化財）

『靖海芻言』から

谷三山の国を開くことへの慎重論が書かれています。以下抜粋要旨です。

「開国を拒絶するとマイナスはあるが、小さい。かたや今開国を許すと日本にとって災いが大きい。」

今の時点においては開国については反対であるとの立場を述べており、これは外国の事情をよく知った上での意見であったといえます。

「開国を許しても兵備をきちっと整えていくことが大事。万一開国しないとの返事をするならば、海辺だけではなく内地においても防御の策を講じなければならない。」

「今の時点での開国には反対だが、西洋の学問に目を向けて西洋のいいものは積極的に学び、国力の充実をはかるべきである。」

とあり、闇雲な開国拒絶論ではないことがわかります。

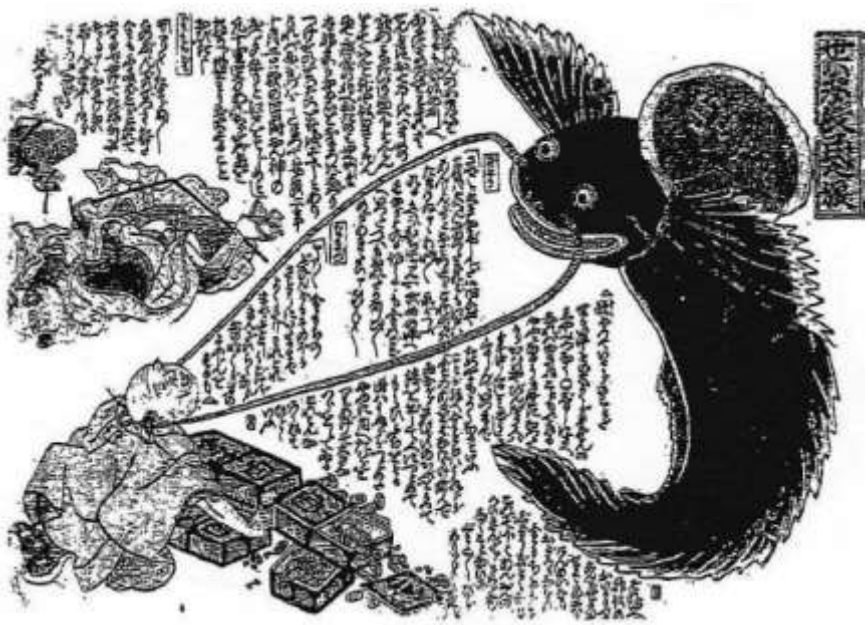
# 吉田松陰の来訪

数年前から平戸、長崎、江戸、東北、近畿を訪ねて著名な学者などに会い、見聞を広げることにつとめていた吉田松陰は、東北で行動を共にした安芸五蔵（あきごぞう　森田節斎の門人）の紹介状を携えて、嘉永6年（1853年）2月13日に森田節斎を訪問し、5月1日まで儒学や歴史などについて討論した後、谷三山の門弟のひとりで『孫子』（中国の兵学の書）に通じていた田井庄の森鉄之助を訪れ、その紹介で5月2日に、鉄之助の子供に導かれて八木の谷三山を訪れることになりました。

森鉄之助が三山のすぐれた学説を語ったところ、松陰は手を打って「妙」と感心し、請うての訪問であったと考えられます。鉄之助は吉田松陰を「篤実な人物で学問をしこれを実際に役立てる志を持っているので、快く応じてやってほしい。」と三山に紹介しています。二人のやりとりについては資料が残っていませんが、対外策や儒学について筆談したのではないかと思われます。

谷三山に教えを請うてからの吉田松陰の行動をみると、長崎に下りロシアの船に乗って海外に渡航しようとし、翌嘉永7年にも下田でアメリカの艦船に乗り海外に行こうとしましたがこれを果たせず、結局自首するにいたっています。

吉田松陰は、谷三山との筆談の中で海外の事情をきちんと認識する必要があるということを悟ったのではないか、また三山の言葉に大いに刺激され、海外に渡りその事情を自分の目でみたいと強く思うようになったのではないか、つまり谷三山が吉田松陰の活動に大変大きな影響を与えたのではないかと思われます。



なまず絵

## 地震とコロリ、大和にも

和親条約が結ばれた嘉永7年は地震でパニックが起きた年でもありました。最初は6月15日に伊賀上野辺を震源地とする地震、続いて11月４日に東海地震、11月５日に南海地震と立て続けに大地震が起こりました。平群郡菅田村の西川左源太は、地震の体験談の中で「こんな地震が起きたのは国のあり方が良くないという天の啓示ではないか」と述べています。

山之坊村の吉川家の記録（『甚太郎一代記』）には、地震により本屋では生活できず、小屋住まいしたと記されています。月ヶ瀬の今西家の記録「地震帳」（奈良市指定文化財）には揺れの強さについて

「大大大大大大大をうぢしんニ付・・・」

と記されています。直下型の大地震がいかに人々を恐怖に陥れたのかがうかがえます。

11月５日の南海地震では津波の被害が大きく、大坂の町の人は船で逃げだそうとしたところ、大津波が来襲して、川の上流へ橋を壊しながら流され、多くの死傷者が出たそうです。

この年の年末に、幕府は、外圧と国内で大きな地震が相次いで起きたことにより、元号を「嘉永」から「安政」に変えました。元号の変更は明治になって「一世一元」の制が採用される前にはよくあったことですが、元号を変えたその翌年に江戸で直下型大地震（M6.9）が起きてしまいました。

この地震の後、ナマズをモチーフにした瓦版が出されるなど「なまず絵」の流行が起こります。「ナマズは地震の元凶」といわれますが、「なまず絵」の中のナマズは悪徳商人をこらしめたり、地震後の普請にあたったりしていて、その姿が大人気となりました。これは、地震を機に、炊き出しで食える、地震復興で仕事の場も増える、貧富の格差が縮まるなど、平等の世を願う借家住まいの人々（都市下層民衆）の思い＝「世直り」意識を反映しているといえるのではないでしょうか。

この後、アメリカをはじめとする五カ国と通商条約を結んだ安政5年から翌年にかけて、国内ではコロリの大流行が起こります。「三日コロリ」が「一時コロリ」となり、激しい病状のコロリがはやります。八木近辺でも同様で、『甚太郎一代記』にも八木・今井でのひどい状況が記されています。

そんな中、もうすぐ訪れる「甲子（かっし）」の年（干支の組み合わせの1番目をさす年で、元治元年がこれにあたる）に大きな変革がおき、きっと次のいい世の中がくるのでは、と「世直り」への期待感が高まるようになりました。

なまず絵(部分)

地震のいろいろ

1854年（嘉永7年）

安政伊賀地震（伊賀・伊勢・大和地震） - M 7.6、死者約1800人。

安政東海地震（東海・東南海地震） - M 8.4、死者2000～3000人。

安政南海地震 - M 8.4、死者1000～3000人。

紀伊・土佐などで津波。大坂湾に注ぐいくつかの川が逆流。

豊予海峡で地震 - M7.4。

1855年（安政2年）

金沢などで地震 - M 6.5、死者少なくとも203人。

安政江戸地震 - M 6.9、死者4700～1万1000人。

参考文献

大和国高瀬道常年代記

（清文堂史料叢書）

清文堂出版 1999

広吉 寿彦、谷山 正道

奈良県の歴史（県史）

山川出版社 2003

和田 萃、安田 次郎、幡鎌一弘、谷山 正道、山上 豊

## 幕末の世相　打ち壊し

通商条約締結の翌年から交易が開始され、外国から工業製品、特に綿糸や綿布が輸入されるようになったことにより、橿原でも盛んだった綿作りや、綿加工業に従事していた人々は大きな打撃をこうむるようになりました。米価が高騰し、「上がる物価に上がらぬ賃金」という状況のもとで、賃金労働者はおおいに困窮するようになりました。

そうしたなか大坂やその周辺地域では「打ち壊し」が発生しました。慶応2年（1866年）の4月から5月にかけて、幕府の長州征伐の際の兵糧米の買い占めが原因となって、大坂周辺地域ではあちこちで打ち壊しが起りますが、大坂での打ち壊しで捕らわれた人が、「首謀者は」と聞かれて「大坂城におられる」と語ったとされています

高田近辺の野口村西蓮寺の住職の手になる『竹園日記』には、今井や八木でも打ち壊しが発生したことが記されています。路頭に迷う人々が多く出て、八木では極貧人に施しが行われていますが、施しをうながされた人が「かたじけないけれど、今日でもう3日食べていません。今食べるとかえって臨終の妨げになる。」と断ったほどの惨状であったとされています。

こうして幕末に米穀の高騰を背景に打ち壊しが続発するなか、食料の増産をはかろうと、後に「明治三老農」のひとりに数えられるようになった中村直三（天理永原）らは品種改良を進めました。大和芝村藩に儒学者としてつかえた小房の前部重厚（しげあつ）も直三の活動を支えたひとりとされています。前部重厚は谷三山の門弟のひとりで、後に大阪府会議員や八木町長をつとめました。

## 尊皇攘夷運動へ

井伊直弼が勅許をえることなく開港したことに対して、尊皇論と攘夷論が結びついて尊皇攘夷運動が高まり、これに対する幕府の弾圧が起きます。安政の大獄です。梅田雲濱（うんぴん）や吉田松陰も弾圧を受け、松陰は安政6年（1859年）に30歳でこの世を去ります。またそれへの反発から万延元年（1860年）に桜田門外の変が起き、井伊直弼が暗殺されます。

このように尊皇攘夷運動が高まるなか、谷三山は高取藩主植村家保（いえやす）に意見書を提出し攘夷の方針をとるよう願っています。この頃三山は目も不自由になっていたため上書は代書されています。この意見書のなかで、三山はこのまま放置すると過激派が外国の居留地を襲撃するなどの障害が生じる、国として一致して攘夷をするべきで、それが幕府の信頼回復になると述べています。

元治元年（1864年）、三山は朝廷にも代筆された上申書を提出し、欧米諸国がアジアに進出してきて、開国を迫り、さらに五カ国条約を

結ばされ、物価高騰によって人々が困窮する中、攘夷が進まない状況を問題とし、『攘夷の三策』を述べています。

1.諸藩力を合わせて応戦し、2.まず横浜港を閉ざし、しばらく後に函館を閉ざす。3.しばらくは取引量を限定し、武力をつけた上、長崎は残して鎖国の状態に戻す。と状況を考慮して攘夷を果たしていくべきであるとの意見を述べています。

ちょうどその頃、大和を舞台に「天誅組の変」が起きます。

文久3年（1863年）孝明天皇の大和行幸に先駆けて、吉村寅太郎（土佐藩）ら尊皇攘夷派の志士が急進派の青年公卿中山忠光と挙兵し、倒幕遠征を目論見ました。百人に満たない志士でしたが、ときの五條代官鈴木源内を襲いました。ところがその翌日に京都で尊皇攘夷派が追放されるクーデター（八月十八日の政変）が起き、天皇の行幸も取りやめになり、天誅組は大義名分を失います。この後天誅組は高取城を襲いますが、大砲を撃たれて負走し、天誅組は解散します。

このできごとで、天誅組のような脱藩浪士らの「寄せ集め」では倒幕は実現できないこと、これを実現するためには藩内の力を結集し、藩を動かさなければならないことがはっきりしたといえます。

この「天誅組の変」には、谷三山に学んでいた原田亀太郎（備中）や、森鉄之助の門人の乾十郎、林豹吉郎、伊沢宜庵（ぎあん）が参加していました。これに対して三山は、「倒幕の戦まだ早し、この徒党に参ずべからず」と述べており、時期尚早であることの立場をとっていました。当時谷三山は高取藩から禄をもらっており、弟子が天誅組に加わっていたことで、大変苦慮したのではないかと思われます。

## 「世直り」への願い

開港以後、経済が大きく変動するなかで、生活困窮者はどのような思いを抱くようになっていったのでしょうか。

彼らは、開港を行った幕府への批判を強めていきました。河内の庄屋が書き留めた手まり歌では、「人のいやがる交易を、はじめたかもん（井伊直弼）の死にざまハ　コノ心地よさ」と歌われています。文久3年（1863年）5月10日に長州藩は下関を通過するアメリカの商船を砲撃し、「攘夷」を決行しました。

それ以降、長州藩に贔屓の声が高まります。伊与国の島の人の記録（元治元年）にも、「物価高騰は交易のせい」で、「このままでは万民が困窮することになる」とあり、攘夷決行した長州に人気が集まったことが記されています。

京都での「おはぎ」の売り買いの話の中で、毛利家の家紋↓をおはぎ（長州萩）に見立てて

「三六万石負けてくれ、一戦も負けん」を

「36文まけてくれ、一銭もまけん」ともじっています。

谷三山生家（奈良県橿原市八木町）

参考年表

1853（嘉永6）　ペリーが浦賀に来航し、開国を求めた

1854（嘉永7）　日米和親条約。下田と函館の港が開かれれ、鎖国体制が崩壊。

1855（安政2）　安政の大地震（安政2年10月2日関東地方南部、M6.9の大地震）

1858（安政5）　日米修好通商条約（総領事ハリス、大老井伊直弼）

安政の大獄（大老井伊直弼らが「日米修好通商条約等」反対派を弾圧）

コレラ(ころり)流行死者三万人

1860（万延元）　桜田門外の変（水戸藩の浪士が大老井伊直弼の行列を江戸城桜田門で襲う）

1862（文久2）　生麦事件　（武蔵国で薩摩藩の行列を乱したとされるイギリス人を薩摩藩士が殺傷）

1863（文久3）　薩英戦争が勃発（結果薩摩藩は攘夷が実行不可を理解しイギリスは薩摩藩に接近）

1864（元治1）　下関の砲台が四カ国連合艦隊に占領される

1866（慶応2）　薩長同盟が成立（政治的、軍事的な倒幕運動に協力する6か条の同盟）

江戸、大坂に打ちこわし運動。『西洋事情』福沢諭吉

1867（慶応3）　大政奉還、江戸幕府が滅びる（十五代徳川慶喜が、大政（統治権）を天皇に返上）

1868（明治1）　戊辰戦争（王政復古で成立した明治新政府が江戸幕府勢力を一掃した内戦）

1869（明治2）　版籍奉還が行われる（諸大名から天皇への領地（版図）と領民（戸籍）の返還）

1871（明治4）　廃藩置県が行われる

八木歴史講演会

## 幕末の大和

講師：谷山正道先生

平成22年11月28日（日）

13：30～15：30

橿原文化会館大会議室

NPO法人八木まちづくりネットワーク主催

この冊子は、平城遷都1300年祭県民活動支援事業により開催した講演会をまとめ、谷山先生の監修を経て作成いたしました。

NPO法人

八木まちづくりネットワーク

~~〒634-0005 奈良県橿原市北八木町2丁目1番5号~~
~~電話・FAX: 0744(37)0804~~
~~電子メール: info@yagi-net.jp~~
~~HP:http://www.yagi-net.jp~~

※この講義録はNPOのHPにも掲載中です。
※無断転載はご遠慮下さい。

八木まちづくりネットワーク

# 大和国高瀬道常年代記

桜井生田（おいだ）の高瀬道常の日記を読むと、当時の人々の思いや動きがよくわかります。彼はペリー来航から明治24年ごろまでの世の中の出来事を書き続けています。ぜひ奈良県立図書情報館などでみてください。

大坂の人々がロシアの艦船の見物に行った話や、開港後生活が困窮してくると水戸のご隠居（斎昭）に期待が集まった話、（尼崎の大物公園に残る）禁門の変で敗れ落ちのびる途中で切腹した長州藩士の墓への群参（「残念さん」参り）の話、長州藩の大坂蔵屋敷取りつぶし後の「無念柳」の話、長州藩の活躍で物価も下がるのではとの期待「長州様のおかげにて世が直り申すべし」、などが綴られていて幕末の社会情勢がよくわかります。

大和での動きとしては、鳥羽伏見の戦い（慶応4年正月）の後、生駒谷の旗本松平氏の領地の百姓の代表が長州藩の陣屋に行き、長州の支配下に入りたいと嘆願する出来事もあり、長州藩への期待の大きさがよくうかがえます。また豪農商（例えば大和高田の村島家）が薩摩や長州藩と交易を始めるといったことも起こりました。

この後、明治へと時代は進みますが、新しい体制になっても生活がよくならない、攘夷も行われず、年貢半減令も撤回される。・・・そうしたなかで、期待を裏切られた人々は徳川の方が良かったと言い出すまでになります。明治維新後の大和の動きについてはまた別の機会にお話ししたいと思います。

# 最後に

慶応3年（1868年）12月９日に王政復古の大号令が出されたその2日後に谷三山は亡くなります。

尊皇は叶ったわけですが、攘夷という意味では三山の思った方向とは違った方向に日本は向かったわけです。三山の攘夷の考えは、やみくもな攘夷ではなく、世界の情勢を見て日本の国体を守りつつ、富国強兵を行うというものでした。

攘夷は果たされませんでしたが、谷三山の思いは、富国強兵や学校教育の充実など、明治政府に生かされていったのではと思います。